５３．優秀演題　発表５

眼科でのコンタクトレンズ購入の重要性

――購入経路による違いの検討――

視能訓練士学科 3 年制

【背景】

現在，インターネットを用いて自宅にいながら簡単にソフトコンタクトレンズ（以下，SCL）を購入できる時代となった．一見利用者にとって便利な時代になったが，薬事法第 2 条第 5 項により高度管理医療機器クラスⅢに分類されるコンタクトレンズは,「不具合が生じた場合人体へのリスクが比較的高い」と定義されており, 処方箋に基づかず使用することは, 人体にとって危険である. このような背景の中，実際 SCL 装用者がどのような意識を持ち購入しているのか, 装用している SCL は適切な矯正であるか疑問に持ち, 本研究を進めることにした.

【対象者および方法】

対象は，近視眼かつ度数入り SCL（カラーCL を含む）を装用している本校視能訓練士学科学生（3 年制課程）30 名 60 眼 18～26 歳（平均 19.7 歳±1.3）で，以下の方法にて行った.

①SCL 装用下でのオートレフラクトメーター測定（ニデック社製 AR-330A）→視力測定→Red-Green テスト→レンズ付加での最高視力が出る最もプラス寄りの度数を求めた．②裸眼でのオートレフラクトメーター測定→レンズ交換法→クロスシリンダー法を用いて完全屈折矯正値を測定した．③また，視力検査後に SCL 装用下での装用感についてアンケートを行った．④「眼科・CL 専門店で購入している群」と「ネット・ディスカウントショップで購入している群」に分類し，t 検定有意水準 5%にて統計分析をした.

【結果】

眼科購入群では, 完全矯正値が 30 眼中 13 眼（43.3%），低矯正が 12 眼（40%），過矯正は 3 眼（10%），乱視矯正不良が 2 眼（6.7%）であった. ネット購入群では，完全矯正値が 30 眼中 7 眼（23.3%），低矯正が 7 眼（23.3%），過矯正は 13 眼（43.3%），乱視矯正不良は 3 眼（10%）であった.

t 検定有意水準 5%にて，両者平均加入度数の分析を行うと，P=0.000499<0.05 となり有意差があるといえる.

また，装用感についてのアンケート（複数回答可）では,「乾燥感」が 30 名中 14 名（46.6%）と最も多く，次いで「眼精疲労」が 8 名（26.7%），「かすみ」が 8 名（26.7%）となった.

【考察】

眼科購入群とネット購入群との比較は，SCL 上での矯正値にバラつきがみられ，その中でも過矯正例が多くみられた．前者で過矯正となった例は 30 眼中 3 眼(10%)で 3 眼共に+0.25D と微量であった．一方後者で過矯正となった例は，30 眼中 13 眼(43.3%)で最大+1.00D の過矯正が検出された．近視の過矯正は，完全矯正に比べ視力を更に向上させることはなく，いたずらに調節の過度の行使を強いる弊害をもたらすのみと報告されており [1]，意図しない過矯正値装用は避けるべきである．以上のことから，ネットで自己判断にて購入した場合, 度数が合っていない SCL を装用するリスクが高まると言える.

装用感については，過矯正処方が一因の不定愁訴である「眼精疲労」を訴えるものが 30 名中 8 名（26.7%），うち過矯正例が 2 名のみであった．これらの理由として, 本研究対象者の平均年齢が 19.7 歳と若年層であり，十分な調節力を有していることから, +0.25D～+1.00D の過矯正では不定愁訴を生じていない可能性が考えられる．しかし，年齢層が上がり，調節力が衰えるに従い，同程度の過矯正でも過矯正処方が起因となる不定愁訴が出現する可能性は十分考えられ，そのような不定愁訴のリスクは避けるべきである.

【まとめ】

ネット購入群では，矯正度数にバラつきがみられ，その中でも過矯正例が多い．眼科購入群では，完全屈折矯正例が最も多い．眼科での定期検査の重要性を理解し, 安心･安全に SCL を使用することが大切である.

今後の課題は，検査対象年齢を広げて同様の研究を行うことである.

【文献】

1）塩谷浩，山口洋・他：過矯正コンタクトレンズ装用者の検討．日本コンタクトレンズ学会誌．37（2），1995，126-130.